

2017 11/28

No.2055

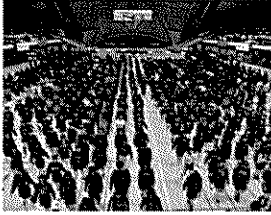
毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



バレーボールのやまゆり杯・小田急旗争奪第42回県家庭婦人大会の総合開会式が16日、藤沢市の秋葉台文化体育館で行われ、参加選手が大会での健闘を誓った。



視点・点描	3
来年は始まっている?	
政治	4
自民大勝後に考える政治課題 首相の解散権、小選挙区制…	
社会	6
どう取り組む、インバウンド対策 商店街だからできることとは	
経済	8
安定重視、指導力に懸念も FRB議長にパウエル氏指名	
くらし2017	10
介護職の人気低下	
広告珍談	12
広告はたのしい⑤② ネジリンボウ一床屋の看板	
NNAアジア経済レポート	13
神奈川景気データファイル	14
神奈川景気データファイル	15

事務局だより

◇12月定例講演会

シンポジウム・交流会

2017年12月7日(木)

横浜ベイシェラトンホテル & タワーズ

▽シンポジウム

午前11時～午後0時30分、4階「清流Ⅱ」

講師は共同通信社の小淵敏郎・政治部長、東隆行・経済部長、沢井俊光・外信部長。コーディネーターは神奈川新聞社の林義亮・取締役論説主幹
演題は「2018年の動向を読む」

▽交流会

午後0時40分～2時、4階「清流Ⅰ」

◇2018年1月定例講演会

2018年1月22日(月)

午後1時30分～3時

横浜ベイシェラトンホテル & タワーズ5階「柏」

講師は東京大学名誉教授、時事放談キャスターの御厨貴さん
演題は「明治150年後、平成30年後の政治を展望する」

視点 点描



来年は始まるってさね?

このやりきれなさを聞いてほしい。いきなり愚痴が始まったが、とにかく10月は怒濤の1カ月だった。衆院選に続いて横浜DeNAベイスターズの日本シリーズ進出。年初には想像もしなかった一大事が重なり、紙面制作現場の整理部の力量が試された。衆院解散がにわかにも現実味を帯びたのが9月17日。その11日後の

28日に解散、10月10日公示、22日が投開票。同日に投開票を迎える川崎市長選、鎌倉市長選に向けた準備を進めていたが、衆院選は桁違いの規模だ。部内の担当が日程を組み、解散日に合わせた立候補予定者一覧から始まり、公示日以降は連日のように特集ページを作成した。並行して県内小選挙区の情勢分析を参

考に投開票日の紙面を試作した。

そこまで準備したのに、当日は台風21号の直撃を食らった。工程が大幅に繰り上げられ、死にもぐるいで紙面を埋めてミスなく時間間に間に合わせたが、県内小選挙区の当選者全員が入った紙面はそう多くは届けられなかった。1カ月間吹き抜けた猛烈な突風の最後に台風とはあまりに非情だった。

一方のベイスターズ。セ・リーグの激しい3位争いを制すると、クライマックスシリーズ(CS)2ステージも勝ち抜いて19年ぶりの日本シリーズに進んだ。通常の紙面以外に、CS進出特集や突破号外を出して大舞台を迎えた。開幕前から午後6時半開始は気になっていたが、もつれる試合が多く、予想通り泣かされた。それでも時間内に作り上げる部員たちのプロの仕事に舌を巻いた。だが、シリーズが決着した第6

戦は延長戦に入り、わずかの紙面に結果を入れられなかった。10月14日のCS開幕から綱渡りの紙面制作を続けてきたが、3週間後の最終日について綱が切れた。

ともに最善を尽くしたが、読者からは厳しい言葉をいただいた。ベイスターズが日本一になった1998年は、横浜高校が春夏甲子園制覇をするなど空前の神奈川スポーツイヤー。運動部員で忙しい日々だったが、整理部の支えがあったのだと今さらながら思う。あの98年は箱根駅伝を神奈川大が制覇したのが始まりだった。皆さまお気付きか分からないが、日本シリーズ終了翌日に全日本大学駅伝で神大が20年ぶりの優勝を飾った。来年のスポーツイヤー再来を予感させる兆しなのか。心の準備だけはしておきたい。

(神奈川新聞社整理部長

岡部 伸康)

ネジリンボウ——床屋の看板

このハゲと、どなられそうだが、ときどき床屋へ行く。てっぺんは切るものがないから、耳のまわりだけ。それだけで大いに、気持ちよくなる。

床屋の看板は、赤白青のネジリンボウで、くるくる回ってる。いったいだれが考えたのだろう。

1545年、フランスのメヤーチキールが、最初にその看板をかかげたという。赤白青といつてもフランス国旗の3色ではなく、赤は動脈、白はほうたい、青は静脈とか。なにやら、おつかないぞ。

なぜ、血管なのか。中世のヨーロッパには、理髪外科医がいた。外科医の地位は低く、理髪で生計を立てながら、外傷の手当てをしたり、高血圧患者の放血手術を行ったりした。そんな彼らの目じ

るし、看板は血塗られた棒であった。血を抜き取られる患者が、しっかりとにぎりしめる棒である。

ほうたいを巻いた棒も目じるしにした。血をうける皿を、棒にするして目じるしにすることもあった。血なまぐさい看板である。

外科医は認知されて独立。理髪師は赤白青を、目じるしにした。血まみれ看板にほうたいが加わって、さわやかになり、世界中に広まったという次第。いろんな看板のなかで、デザイン化された、すぐれた看板といえよう。

その看板は日本にも伝わって、アルヘイボウと呼ばれた。ポルトガルから伝来した砂糖でつくったお菓子、有平糖あへいとうに似ているからと。おもしろいのはメヤーチキールが発案してから5年後の

1549(天文18)年、ポルトガルのザビエルが、アルフエロアと呼ぶ砂糖を、日本にもたらした。ネジリンボウは、わずかな年数で、伝播したのである。

図は、ハサミとクシとカミソリのカタチで訴求する、日本の床屋の看板である。

江戸時代初期、にぎわう京都を描いた数多くの《洛中洛外図》のなかで、名作とされる舟木家本(六曲一双屏風の右隻)の一部である。

鴨川の流れ、五条大橋が架かっている。清水寺で花見をたのしんだ町衆たちが、ふざけながらやっ



てきた。物もらいがいる、八卦見はちのけみがすわってる。橋ぎわにこの床屋がある。床を置いて、よしずや布幕をめぐらせた仮設の店を、床屋という。

お客は手に持った布で、切られた自分の髪の毛を受けようと、神妙な顔つきの若いおさむらい。珍しそうに見入っているのは、都見物のお上りさんか、右側、ななめに見えるのは橋のてすり。

文字は無い。カタチだけで理解できる、みごとな看板である。額縁のようで、ハサミとクシとカミソリは絵なのか、それとも実物を取り付けられているのだろうか。

この屏風には2728人の町衆が描かれ、日々の暮らしや商いを記録して、貴重な風俗研究資料と評価されている。

(美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住)

(図) 舟木家本《洛中洛外図》より。東京国立博物館蔵